

歌曲

現代音楽の先達

芭蕉紀行集 と 箕作 秋吉

土肥 みゆき



——『時代精神を把んだ旋律が音楽の生命線である』……旋律は和声を決定はしない。けれど、和声のムードを決定する。……私は、従来日本的和声という事について度々誤解を受けた。私は決してなんでも日本的な和声（五度和声）を用いようとは主張しない。ただ、日本的な旋律にはこれを生み出す和声を用いないと耳が矛盾を感じはしないかというのである。簡単にいえば『旋律の持つ気分と和声の醸す雰囲気とは同一のものでなくては』というのである。

（1932：旋律礼讃）より

箕 作 秋 吉

Summary

“Basho kikoshu” and Mitsukuri Shukichi

Miyuki Dohi

The poetic travel diary *Oku no hosomichi* (*The Narrow Road to the Deep North*), sometimes called “the Bible for travellers,” was written 300 years ago by Matsuo Basho (1644–1694) who succeeded in raising *haiku* to the level of a profoundly serious art form. His works have long been highly valued as our great traditional literary pieces and today his “haiku poetry” is enjoyed all over the world.

After the introduction of Western music in the Meiji era, Japanese musicians were much influenced by the music in the foreign tradition. Some of them made attempts to compose songs of their traditional literature, drawing on the Western styles, and such songs were called *geijutsu kakyoku* (art songs) .

Mitsukuri Shukichi (1895–1971), a doctor of science and master of modern Japanese music invented a unique theory of harmony “Godo wasei riron,” and composed an art song “Kakyoku: Basho kikoshu” based on that theory.

The song, with the words and the tune unified, represents *wabi* and *sabi*, gorgeous and lonely beauty in life and nature, to produce an impressive microcosm.

I’d like to introduce this masterpiece as a memorial to the 300th anniversary of *Oku no hosomichi*.

芭蕉紀行集

松尾芭蕉句

野ざらしを心に風のしむ身かな
馬にねて残夢月遠し茶のけむり

—「野晒紀行」より—

海くれて鴨の声ほのかに白し
冬の日や馬上に氷る影法師

—「笈の小文」より—

あらたふと青葉若葉の日のひかり
閑かさや岩にしみ入る蟬の声

—「奥の細道」より—

荒海や佐渡によことふ天の川
五月雨の空吹きおとせ大井川

—「元禄七年紀行」—

菊の香や奈良には古き仏達
旅に病て夢は枯野をかけ廻る

—「元禄七年辞世」—

箕作秋吉の生涯

土 肥 みゆき

1902年（明治35年）—体操以外は乙をとったことがないので、音楽も別に下手ではなかったらしいが、音楽の先生はえらく非文化的で、クラスの友人達に青筋を立ててビンタを食わすことが屢々あったので音楽を特に好きになることが出来なかった。以上の如く小学校の音楽生活はむしろマイナスと考えられる。

（1950：私の小学・中学時代より）

1910年（明治43年）—中学に入ると—当時の唱歌作曲家として有名な田村虎蔵先生¹⁾が音楽を教えていた。「七草千種」や「電車唱歌」等の作曲者の音楽教授法も当時としては、画期的なものだったらしい。3年頃までに基礎的なことを教えると各人に芸術歌曲を与えて助長する方法を採用していた。私はシューベルトの「小夜曲」を与えられた。

（1950：私の小学・中学時代より）

1913年（大正2年）—卒業後、音楽に進みたい気持ちはあるが、父・元八の大反対にあい断念した。上野の図書館に通い、多くの音楽書を読んだ。

1915年（大正4年）—1年の同室の二宮君の詩が当選したのに、一夜でつけた私の曲がまた当選しましたから（審査員は弘田竜太郎）同室にとっては大事件で、賞金合計六円也で大コンパを開いて「食えや、唱えや」の大きさをしました。これが今日、作曲をやる病みつきとなったわけです。（第一高等学校一年）（大正天皇の御大典奉祝歌「東海波」 作詩 二宮武治（1956：私の歩んできた音楽の道より）

1916年（大正5年）—1915～1920年頃、つまり私の学生時代に、おこづかいをはたいて、銀座の十字屋でビクター黒盤のドビュッシーの「牧神の午後」を手にいれました。昔の割れやすい一枚の盤を大事にかかえて、満員電車で、本郷曙町の家に帰りつき、早速かけてみましたところ、日本で作曲されている洋楽より、われわれに近いものを感じて心を打たれました。

（1957：私の印象に残った名曲・名盤より）

箕作秋吉氏の生涯は、上述の尊父元八氏の音楽進学大反対により、化学者としての職場を守りつつ、やむにやまれぬ音楽への精進が母体となっていたようです。

箕作家は、美作国津山藩の侍医を務め、曾祖父院甫氏の時、藩主松平齊と共に江戸に出ています。氏は宇田川玄真につき、深く蘭学を学び、西洋医学の膨大な訳業、歴史学・自然科学・地理学と広範囲にわたる著作と、指導者としても活躍し、当時徳川幕府が禁止していたキリスト教にも深い関心を寄せ、深刻な詩作も多く、他の蘭学者には類をみない秀れた足跡を、日本近代文明発展の上に残しています。

尊父元八氏は、東京帝国大学教授の歴史学者で、「フランス大革命」二巻（1919～1920年）等、明治期には珍しい著述を発刊し、十年間の在欧中には、常に音楽に親しみ、特にワーグナーのオペラに深い関心を寄せ、母堂は日本伝統芸術「能楽」と「箏曲」や「鼓」を好まれたと聞いています。

何代にも渡って蓄積された広い学識と深い教養、鋭い感性とパイオニア的精神を持つ秀れた家庭環境が、秋吉氏の背景にあったと思います。1939年（昭和14年）化学者として「煙粒子の荷電に関する研究」で理学博士の学位を得られ、その後、戦中の海軍での活躍と並行して、音

楽家として「五度和声論」の音楽体系の樹立と国際的な現代音楽分野での活躍が、それを裏付けています。

今回、箕作氏の作品演奏にあたり、俊子未亡人、次女美沙子氏は、無名の私に夥しい資料を提供して下さい、又、愛弟子の小山郁之進氏²⁾には、御懇篤な御指導を頂きました。身に余る幸せと感謝しております。

昭和62年3月15日、湘南のキラキラした春の光とほのかな磯の香に包まれた茅ヶ崎浜須賀の箕作家を訪れました。平塚での戦災の後、1946年（昭和21年）よりお住まいになったというお家の玄関には、氏が1921年（大正10年）東京帝国大学工学部応用化学科を卒業と同時に御結婚、秋9月には、新婦を残して物理化学専攻のため、ベルリンのカイザー・ウィルヘルム研究所に渡欧なさった時の頑丈重厚な鉄のトランクが時代を秘めて据え置かれ、当時の留学の並々ならぬ御苦労がしのばれました。

1945年（昭和20年）10月、海軍を依願退職され、貧乏を覚悟して作品を残すことの初志を買かれた氏のお部屋には、御尊父でしょうか、写真が飾られ、黒いたて型のピアノと茶色に変色した古い楽譜が、生前そのままに積み重ねられていました。

気品のある美しい奥様より、作品完成へのプロセスは伺えませんでした、「案外面白いことを話すですよ。」「若い時は大変お洒落で、自分のネクタイと共に、縫^{ぬい}の入った半衿など、お土産に買ってきてくれました。」「煙草もお酒も飲まず、お菓子が好きでした。」等、故人の思い出話を伺い、家庭人としても温厚なお人柄がしのばれました。「廊下で長い間、ぼんやりして坐っていましたのは、時に作曲中でした。」というお話にも、のどかな在りし日の箕作家がほほえましく浮かびました。小山氏が夫君の芸術活動に寄せられた夫人の深い愛情と理解・協力を讃えられていますが、静かなお姿より、明治の女性の内に秘められた情熱を察することができました。又、半導体業界での御活躍の御長男、元秋氏は「父は非常に穏やかな人物で、おこったことは一度もなかったですね。完全な自由主義の人間でした。それと、何か思い立つとすぐ実行に移すんです。発想を大切にする人で、夜中の2・3時頃でも突然起き出してピアノに向かうなんて事がよくありました。スポーツ万能で、柔道・水泳・野球、なんでもやりました。エピソードとしては、留学中、学資が足りなくて競馬でかせいだそうです」と語っていられます。

しかし、国際音楽評議会の書記長を、氏の後受けつがれた戸田邦雄氏³⁾は「故箕作秋吉のプロフィール」で、音楽行政的な会議での氏は、非常に温厚でニコニコしておられるかと思うと、何かのきっかけで、突如手がつけられないくらい怒り出し、憤懣を吐露された——それは楽壇名物の一つでさえあった、という事を、今になっては、懐かしく想い起こすのである——と、氏の一面をしるしていられます。

化学者として海軍技術研究所における、さまざまなお仕事の成果は年譜に任せ、氏の音楽の軌跡にスポットをあててみたいと思います。

疑うまでもなく、幼い頃から家庭では高度なクラシック音楽が響いていたことでしょう。

エリートコースの第一高等学校・東京帝国大学在学中は、楽友会で「御大典奉祝歌」「記念祭寄贈歌」「記念祭寮歌」等の作曲、オーケストラの指揮を楽しまれ、やがて留学のドイツ・ベル

リンでは、ニキシュ指揮のベルリンフィルハーモニーや、二晩つづきのブゾーニのモーツァルトピアノ協奏曲等、数多くの本格的な演奏にふれ、「音楽田舎者」と自覚しつつ、益々芸術音楽に興味を覚えられたようです。1923年（大正12年）プロシヤ芸術院長とベルリンミュージックアカデミー院長のゲオルグ・シューマンに和声を学ばれたのを皮切りに、1925年（大正14年）帰国と共に、管弦楽法をケーニッヒに、編曲法を菅原明朗に、デュボアの対位法とフーガを池内友次郎に、クラッテの対位法を池譲に、指揮法をローゼンシュトックに学び、本格的な研究が始まります。

1928年（昭和3年）東洋的旋律の「二つの詩」1929年（昭和4年）ラヴェル的な「小曲集」の作曲と共に、今までにない何か異なった音体系があるに違いないという信念のもとに、東洋・日本、西洋音楽の十二音音楽までの和声体系の発展を検討し、1929年（昭和4年）には日本の「五音階」に対し「五度和声論」を提唱、「フィルハーモニー」「月刊楽譜」「音楽評論」「音楽倶楽部」を経て、1948年（昭和23年）氏の著書「音楽の時」に評論編、随筆編と共に理論編として之を発表されています。

作品「芭蕉紀行集」（1930年～1931年（昭和5～6年）作）は、五度和声論のもとに、音響的な数式による理論に基づき、作曲された歌曲の結晶といえましょう。

しかし当時の楽界では、1928年（昭和3年）フランス・パリより帰国し、斬新な手法を駆使した現代詩人、深尾須磨子の作詩による、若冠25才、橋本国彦作曲「^か薔^び」「^{はんみょう}斑猫」が、ドビュッシー・ラヴェルの影響の濃い新しいデクラメーション・スタイル（朗唱法）を使い、図りしれない大きな衝撃を作曲界に与えていた時代であり、箕作氏が作曲家として日本の音楽界に認められたのは、後年1934年（昭和9年）第3回音楽コンクールに「小交響曲ニ調」が第2位に入選、翌1935年（昭和10年）チェレブニン・エディションを経て、ユニバーサル・エディションより出版、ヨーロッパの諸都市で演奏され、1939年（昭和14年）氏が39才の時、ワインガルトナー賞を受けられて後のことと思われます。

昭和初期の作品とは思えない新鮮な五度和声論の実験的な作品に対する当時の批評をあげてみたいと思います。

1933年（昭和8年）—この人（箕作秋吉）の音はきれいだ。そしてそこには独創的な音がある。これだけ良い条件を持ちながら、この音が動かない。全然動かないというのではなく、極く自然の動きは見せているのだけれども、それは丁度、飴をひきのばしたようなつかみ所のない動き方だ。

（O. H. M. 現代日本の作曲界の人々より）

1938年（昭和13年）—秋吉元作氏作品、現代詩集第二、第三集、秋吉氏の作品は確かに真実な熱情のこもった作品であって、真に我々の同感を寄せしむる充実した作品である。西洋音楽に没入した日本人として、相当のインテリである以上、斯く趣く可きは当然である。しかしあまりにも当然の道を行き、偽りなき真実に触れるということが、高い芸術の必ずしも快しとしない点であるということを否むわけにいくまい。氏の芸術の欠点はあまりに直接的で、高い風韻を感じしむる余裕を持たないという点である。（中略）ところで我々は、氏の真実を認め、多大の同感を感じるとするが、それは果たして現代意識を持つ芸術家としての我々の心からか、また明治・大正時代の芸術を離れた人間としての心からか、その点は読者の判断におま

かせするより外はない。

(久志卓真：現代作曲家連盟第4回演奏会を聞くより)

作品が楽譜になった以上、発表は演奏家にゆだねられるのですが、これは作曲家にとって幸せな時と不幸な時を与え続けてゆくものです。又、氏が当時我が国で音楽の主流派となっていた東京音楽学校出身者でなく、在野の作曲家であった事も、当時の音楽家より得も言われぬ無理解な立場におかれた原因だと思います。

1935年(昭和10年)―箕作君が、はたからみると、ちょっと異常と思われるほど、海外と結びつくことに情熱を燃やしたのは一歩くもそうでしたが、そのひとつの原因は、当時、また新しい作品に対して理解のある演奏家が絶無に近かったということもあるんですね。いまとちがって優秀な技術をもった演奏家にいたっては、さらにひどいものでしたがね。そこで、自分たちの作品を実現してくれる可能性という問題にいつも悩まされていたわけです。

(1976：秋山邦晴・「新興作曲家連盟から現音への歩みのなかで」より)

1930年(昭和5年)には新興作曲家連盟創設⁴⁾をはじめ、「近代日本作曲家連盟⁵⁾」(1934年)「日本現代作曲家⁶⁾」(1935年～1936年)での活躍と共に、作品は戦争にそって、文部省より依頼の「選定国民歌」「皇紀2000年の奉祝序曲」「愛国百人一首」等を生みながら1945年(昭和20年)の終戦を迎えます。

公職追放をローゼン・シュトック氏の好意で解除となった氏は、その後、映画音楽・放送音楽・校歌・社歌・童謡・〈世界をつなげ花の輪に〉の労働歌等、様々な分野に作品を拡げる一方、翌年「日本現代音楽協会⁷⁾」を結成し、1952年には国際音楽評議会⁸⁾(IMC)を通して、その活動は世界各地に拡がってゆきます。

作曲家として、コンクール審査委員として、音楽会議の日本代表として、後輩を世界の音楽界に推薦する先輩、また指導者として活躍の他、数多くの講演・著作も続けてゆかれます。「現代の作曲家達、三善晃、松下真一、池辺晋一郎、野田暉行、故八村義夫氏と、箕作氏の間に断絶はないが、段落は感じられる」(中島健蔵氏⁹⁾の論評)といわれていますが、明治生れの氏は壮年期に、絶対主義の天皇制のもとで、軍国主義の独走する社会の中で、原爆被災・敗戦という惨な日本文化不毛の時代を経験されたからでしょうか。

当時、西洋の技法を土台とし、日本の民族的作曲を推進する力となりながら、氏を中心とする近代音楽樹立の先達者に対して、日本の社会は、その純粋な芸術を育てるのではなく冷たく無理解であった事は否めません。しかし、氏達の日本近代音楽への情熱が、先達者としての信念が、起点となり、現代の国際的に活躍する日本現代音楽家達の存在があると思われます。

中庸を得た思想より生まれた温かな音楽、格調の高さ、ナイーブな抒情、化学・物理と音楽の結合よりなる透明な美の究極は、時代を超えても神秘を秘め、静寂な水面に咲き出でた睡蓮のように、清冽なメッセージを送り続けてゆくことでしょう。

1970年(昭和45年)75才、日本現代音楽協会創立40周年記念と紫授褒章祝賀会に御夫人と出席された氏は、古稀を過ぎた方とは思えぬ元気なお姿を見せられながら、数ヵ月後の5月10日、

午前6時、狭心症のため茅ヶ崎の自宅で他界されました。日本の作曲家の長老としての晩年は、尊敬と信望を集めていられたと伺っています。

1988年3月24日

〔注〕

(1) 田村虎蔵

滝廉太郎とはほぼ同時期の人、従来の小学唱歌集は児童にとって極めて難しいものが多いのを嘆き「児童には児童の詩があり、又、曲節も同様である」と主張し、言文一致運動を提唱する。東京師範勤務の明治30年代、幼児唱歌に取り組み、石原和三郎作詩の「はなさかじい」「うらしまたろう」等、言文一致唱歌を作曲する。

(2) 小山郁之進

武蔵野音楽学校研究科卒。ピアノをパウル・ショルツ氏、作曲を箕作秋吉氏に師事。母校・新潟大学、広島大学、エリザベト大学教授を経て現在、上智大学モンテッソーリ教育養成コース講師。「文部省、在外研究員としてハンガリー・オーストリーで研修、日本代表として世界の各地で研究発表を行う。」「ドメニコ・スカラッチ」「家庭音楽論」「オルフ音楽教育の原質・目的・方途について」等、著書・論文多数。箕作秋吉氏の多くの論文を「和声体系発展の史的概観 十二音音楽まで」として編集発行。

(3) 戸田邦雄

東大法学部出身の作曲家で、諸井三郎氏に師事。昭和19年、音楽コンクール2位。昭和28年、尾高賞。昭和31年、レジオン・ドヌール・オフィシェ勲章。現在、洗足学園大学音楽学部長教授。国際音楽評議会、日本現代音楽協会会員。

(4) 新興作曲家連盟 創設 1930年4月28日（昭和5年）

幹事・塩入亀輔、橋本国彦、箕作秋吉（秋吉元作の名を使う）

(5) 近代日本作曲家連盟（改称）1934年12月14日（昭和9年）

実行委員・箕作秋吉・小松清、諸井三郎、内海誓一郎、山本直忠、山根銀二、書記・伊藤宜二。

(6) 日本現代作曲家連盟（改称）1935年9月29日（昭和10年）

委員・箕作秋吉、諸井三郎、大木正夫。書記・伊藤宜二。1936年8月20日、箕作氏は委員を辞任する。

(7) 日本現代音楽協会（現音）結成 1946年2月1日（昭和21年）

委員長・平尾貴四男。書記長・箕作秋吉。創立50周年を1981年に迎えた「現音」は、1930年（昭和5年）新興作曲家連盟として発足し、故箕作秋吉、清瀬保二、松平頼則、安部幸明、高田三郎、故清水修、別宮貞雄、柴田南雄、故入野義朗氏を中心となり、運営してこられたが、現在会員は約202名、国際現音に日本支部として加盟していて音楽祭への作品参加と秋春音楽展各六夜を開催している。

(8) 国際音楽評議会（IMC）

日本音楽会を代表し、音楽の国際問題に対処する機関。

(9) 中島健蔵（明治36年2月21日生）

仏文学者、評論家。東京生まれ。東大仏文科を卒業、母校にてヴァレリーの講義をする。日本ペンクラブ常任理事、昭和研究会会員。戦後の活動は極めて広範で、日本著作権協議会、日中文化交流協会の責任者であった菊池寛賞を受賞。音楽評論にも専門的業績がある。

日本に生きる日本文化の三つの起点

箕 作 秋 吉

私は日本音楽文化の起点を「伝統」と「技術」と「思想」の三つにしばってみたい。

「伝統」がその一つの重要な起点であることは既に多くの方々のご意見によって疑うべくもないことである。しかし次の「技術」となると問題が大いにあるだろう。東洋または西洋の技術を巧妙に採り入れただけで果たしてよいだろうか。もしもわれわれ日本の伝統と結びつかない鵜呑みの技術をこれと結びつけただけではどうにもならないだろう。日本の民謡や日本のリズムに西洋の技術を形通りに使用しただけの音楽を作り上げたのでは、従来多く見られた失敗作と同様な、木に竹をついだおかしい製作を繰り返すに過ぎないだろう。

東洋の音楽も西洋の音楽も源を質せば、五度または四度の音列から生まれる、十二音律を含む音の種々な配分によって生まれているのである。つまり根元的には同じであっても、その成り立ちや構成の特異性が各民族の独特な民族性を生んでいるのである。従ってその特異性に適応した技術が工夫され研究されてはじめて進展した文化が生まれてくるであろう。その特異性は民族の日常生活に含まれる風俗や言語をよく反映しているのであるから、それをよく探索した研究の成果を採り入れるだけでなく鋭い感受性を働かして、真に民族性に適する技術を獲得しなければならないのであるから仲々むずかしい仕事である。

最後の「思想」ということになると更に色々の議論が出る。音楽に思想は不要であるという説さえ屢々出現している。私は何も「平和交響曲」や「革命カンタータ」等の作曲を主張しているのではない。音楽史的に見て、才能の多寡によって多少異なりはするが、たんなる「伝統」と「技術」のみにによって生まれた多くの作品が、その当時どんなにもてはやされても、今日全く姿を消してしまったではないか。十指に及ぶ交響曲を発表し、門前市をなした作曲家—当時の音楽書には一流の現代作曲家の作品としてその作曲が引例されている—の名が今日、古いプログラム上で、または一曲の小曲のみによって僅かに知られているだけである事実を知って、作曲家は肌に粟を生じないではいられないだろう。

モーツァルトがザルツブルグの大司教のお抱えに耐えきれずウィーンに去った後の百曲ばかりの作品が今日不朽の名作として屢々演奏されているのは彼がその間、社会相を良くみつめ得たからであろう。ベートーベンの「思想」については今更語るまでもないであろうが、宗教音楽を多く書いたバッハでさえこの反証にはならない。宗教上の大革命であった宗教改革の巨人マルチン・ルーテルの偉業を成就させたアイゼナッハ市に育ったバッハが、その影響を受けなかったと誰がいえよう。自分の生きる社会相をよく見つめて洞察する叡知があればこそ、その作品が不滅の確固たる生命を獲得するのではないだろうか。

(音楽旬報 7月20日号)

我が師の思い出

福 島 雄次郎

我が恩師にむかってこんな失礼なことをいっていいのかどうか。要するに、わが師つまりぼくの先生、箕作秋吉氏は現代のエコノミックアニマルから見るとお・か・ねの計算、つまりその計算のつじつまは結果的にはよく合うのだが、その計算の要領が実にまわりくどくてややこしいのである。以前、新萌会という箕作門下の作曲グループを結成して毎年作品発表をおこなっていたことがあるが、たとえば演奏会の費用の計算など一般に我々が考えることは、収入と支出を別々に割り出して、その差額を出すのが普通である。ところが箕作式計算法は誰さんからの広告収入がいくらあるから、誰さんの演奏料に支払ってとか、誰さんと誰さんが買ってくれたチケット代を会場費にあてる、といった具合であれやこれや組合わせをやっているうちに最終的には全部あてはまって、我々がポカンとしている間にみごとに解決してしまうのである。要するにわが師にとって、同じお・か・ねではあっても、そのひとつひとつに必ず人間的な何らかの意味づけをしないでは、気が済まなかったのではなからうか。あまりのややこしさにビジネスマン的計算法をかって出ようものなら、いまにも叱られそうになったものである。又、発表会のたびごとに我々貧乏書生の金銭的負担を少しでも軽くするために、自らプログラムの広告の注文をとりをかけまわったり、又、演奏家や会場の交渉まで、できるだけ費用を安くあげるためにあらゆる面倒をみていただいたことを覚えている。

師の全作品に流れている音楽の美しさは、こういった人間に対する純粋な思いやりの美しさではないかと思う。日本音階に対する五度和声理論は余りにも有名だが、そういった理論も自分の作品に駆使しながらも、それらはつねに温かい人間の抒情といったものと結びついており、我々を感動の世界へと導いてくれるのである。

毎年、夏になると茅ヶ崎海岸の先生のお宅を訪ねては、海水浴を楽しむのが我々の年中行事のひとつとなっていた。海から帰ると冷え切った体をあたためるために、いつもあついコーヒーとお風呂が用意してあった。

去年も四月なかば頃だったと思う。桜の花もすでに散ってしまったおだやかな春のひるさがり、駅のホームに立っていた私を、誰か呼びとめる声にふと振りむいてみると、例のハンチングに茶色のコート、元気そうなニコニコ顔の箕作先生の姿であった。あの時お会いしたのが最後になろうとは一。藤沢駅の乗りかえの階段を不自由な足を少しでも補うため、二人で肩を抱き合いながら一步一步ゆっくり登っていった。そのときの体温のぬくもりをぼくは生涯忘れることができない。

(1972年1月23日記)

熊本県八代市生まれ。東洋音楽短期大学（現在、東京音楽大学）作曲科卒業。

1962年・第2回 T. B. S 賞受賞。

1963年・第32回毎日コンクール作曲部門第3位入賞。

作曲を箕作秋吉氏に、指揮をアルベルト・レオーネ氏に師事。

現在、鹿児島短期大学音楽科勤務。日本現代音楽協会、九州作曲家協会会員。

箕 作 秋 吉 年 譜

年号	西歴	年齢	社 会 情 勢	音 楽 活 動	私 的 生 活
明28	1895				<ul style="list-style-type: none"> 10月21日 西洋史学者、箕作元八の長男として、東京に生まれる。 本郷誠之小学校入学。 東京高等師範附属中学入学。
35	1902	7	1月 日英同盟条約調印		
43	1910	15	8月 日韓条約調印		
45	1912	17	7月 明治天皇没	<ul style="list-style-type: none"> 中学3年の時「亡き子に」の子守歌、シンフォニエッタ、クラシカの「アリア」作曲。 	
大2	1913	18	9月 全国にコレラ流行 8月 ハーグで万国平和会議		<ul style="list-style-type: none"> 父に音楽進学を反対され断念。
3	1914	19	8月 第一次世界大戦		
4	1915	20	5月 日華新条約調印	<ul style="list-style-type: none"> 大正天皇の御大典奉祝歌「東海波」を作曲。 	<ul style="list-style-type: none"> 第一高等学校入学。
6	1917	22	11月 ロシア社会主義革命、ソビエト政権となる		
7	1918	23	11月 第一次世界大戦終る		<ul style="list-style-type: none"> 3月 第一高等学校工科卒業。4月 東京帝国大学工学部入学。 東京帝国大学工学部、応用化学科卒業。 3月 結婚。9月 渡欧。 1月 長女 美津子 生れる。
10	1921	26	11月 ワシントン会議 12月 日英同盟廃棄	<ul style="list-style-type: none"> 2月 楽友会の演奏会でメンデルスゾーン「イタリヤ交響曲」と「若き日の思い出」を指揮。 	
11	1922	27	12月 ドイツ・マルク紙幣暴落		
12	1923	28	9月 関東大震災	<ul style="list-style-type: none"> プロシヤ大学附属カイザー・ウィルヘルム研究所に入所。ゲオルグ・シューマンに和声学を学ぶ。 	
13	1924	29	11月 東京放送局の設立	<ul style="list-style-type: none"> カイザー・ウィルヘルム研究所を退社。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月 帰国。
14	1925	30	1月 日ソ国交回復	<ul style="list-style-type: none"> 4月 日露交歓交響楽演奏会 	<ul style="list-style-type: none"> 4月 長男 元秋生れる。
15	1926	31	12月 大正天皇没、昭和改元	<ul style="list-style-type: none"> 池譲にクラッテの対位法、池内友次郎にデュポアの対位法とフーガ、菅原明朗に編曲法、J・ケーニッヒに管弦楽法、J・ローゼンシュトックに指揮を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 海軍技術所で化学兵器の研究をする。
昭2	1927	32	5月 中国排日運動激化		<ul style="list-style-type: none"> 7月 長女 美津子死亡。 11月 次男 豊秋生れる。
3	1928	33			
5	1930	35	1月 ロンドン軍縮会議	<ul style="list-style-type: none"> 4月 新興作曲家連盟創設(清瀬保二氏らと) 	
6	1931	36	9月 満州事変起こる	<ul style="list-style-type: none"> 10月 新興作曲家連盟主催の〈山田耕筰と語る会〉に出席。 	
7	1932	37	1月 第一次上海事変勃発 3月 満州国建国宣言	<ul style="list-style-type: none"> 11月 新興作曲家連盟例会で「五度和声について」の講演を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 2月 三男 光秋生れる。
9	1934	39	8月 ドイツ・ヒトラー総統となる	<ul style="list-style-type: none"> 11月 第3回音楽コンクールで「小交響曲(シンフォニエッタ)」が作曲部門で第2位となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月 次女 美沙子生れる。
10	1935	40	3月 ドイツ再軍備宣言	<ul style="list-style-type: none"> 1月 近代作曲家連盟で活躍。 8月 管弦楽法送復活の上申書を提出する。 11月 「シンフォニエッタ」をヨーロッパで出版する。 3月「シンフォニエッタ」がラジオ・パリで放送。 3月 国際放送管弦楽懸賞で「ヴァイオリン・ソナタ」2位。 12月 「芭蕉紀行集」をルネ・バトンの指揮でラジオ・パリが放送。 12月 銃後国民の士気を昂揚するため文部省より選定国民歌を依頼される。 	<ul style="list-style-type: none"> *1933年より1940年にかけて7つのペンネームを使っている。「秋吉元作」の他、「箕作良秋」「秋山準」「秋葉豊」「秋吉生」「箕作生」「槐生」等、本名で発表してはいけないという軍の命令によるもの。
11	1936	41	2月 2・26事件 11月 日独防共協定調印		
12	1937	42	11月 日独伊三国防共協定成立		
13	1938	43	3月 ドイツ・オーストリア合併 4月 国家総動員法公布		
14	1939	44	9月 第二次世界大戦始まる	<ul style="list-style-type: none"> 1月 「シンフォニエッタ」ワインガルトナー賞の優等となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 8月 「煙粒子の荷電に関する研究」で大阪帝国大学より理学博士の学位をうける。

年号	西歴	年齢	社会情勢	音楽活動	私的生活
昭15	1940	45	9月 日独伊三国同盟調印	・管弦楽序曲「大地を歩む」日本中央連盟の懸賞1等入選。	・4月 勲五等瑞寶賞を受く。 ・5月 官長機密による実験委員を命じられる。
16	1941	46	12月 太平洋戦争始まる	・5月 日響でハイドンの交響曲〈告别〉指揮。海外放送される。 ・11月 「音楽公論」の編集顧問となる。 ・「亡き子に」文部省推薦レコードとなる。	
17	1942	47	6月 ミッドウェイ海戦敗戦	・管弦楽「二つの詩」日響で演奏。	・6月 労働技術研究統計調査を命じられる。
18	1943	48	2月 日本軍ガダルカナル敗退、ドイツ軍降伏 9月 イタリア降伏	・1月 愛国百人一首の作曲を委嘱される。	・5月 化学研究部勤務となる。
19	1944	49			・3月 海軍より技術者功章受章。
20	1945	50	1月 本土空襲、激しくなる 4月 米軍、沖縄に上陸 8月 ポツダム宣言受諾	・終戦後、作曲家として専念し、映画音楽・放送音楽・校歌・社歌・童謡の分野で活躍する。 ・11月 国際現代音楽協会日本支部再建委員会開催委員長となる。	・10月 海軍を依願免職。
21	1946	51	11月 日本国憲法公布	・2月 日本現代音楽協会設立。	・5月 茅ヶ崎小和田7106に移る。
22	1947	52	3月 教育基本法成立	・4月 新作労働歌〈世界をつなげ花の輪に〉を作曲、メーデーで歌われる。	
23	1948	53	11月 極東軍事裁判、判決	・日本放送協会契約、作曲家となる。	
25	1950	55	6月 朝鮮動乱、米軍の出動	・「芭蕉紀行集」第24回国際現代音楽祭で初演（戦後、日本人作曲家として初めてである）	
29	1954	59	7月 自衛隊発足	・「ピアノ協奏曲」尾高賞佳作に入選する。 ・第29回国際現代音楽祭（バーデンバーデン）提出曲の審査員となる。	
30	1955	60	7月 砂川事件	・国際音楽評議会、国民文化会議、中国音楽家との交流会に出席、IMCの初代委員長となる。 ・東南アジア音楽会議、フィリピン（マニラ）に日本代表として出席する。	
33	1958	63	2月 アラブ連邦成立		・9月 ソビエト文化省の招きでソビエト訪問。
34	1959	64	8月 北朝鮮帰還に関する日朝協定調印	・1月 国際音楽評議会国内委員会、作曲部門（1部）委員。	・4月 門下生により新萌会が結成。
36	1961	66	1月 日ソ文化協定調印	・4月 東京世界音楽祭が開催。	
39	1964	69	10月 東京オリンピック開催	・8月 ジョルジョ・エネスココンクール声楽部門の審査委員としてルーマニアに招待される。	・5月 特許庁資料分類室に再就職。
41	1966	71	7月 北ベトナム徹底抗戦表明		
43	1968	73	8月 ソ連、チェコに侵入	・飢餓運動のために「農民の歌」を作曲。（国連より要請）	
44	1969	74	7月 ジュネーブ軍縮会議に参加。沖縄デー騒乱		・10月 名古屋の自由学院の建設を見学中、転落、負傷。
45	1970	75	3月 日本万国博		・11月 昭和45年度、紫綬褒章の受章決定。
46	1971		1月 沖縄米軍、毒ガス移送で住民の阻止運動		・5月10日 狭心症のため茅ヶ崎の自宅で死去（75歳）。

歌 曲 作 品 年 表

作曲年代	題 名	作 詞 家	拍子	調	発想標語など	伴 奏	所 要 時 間 (分)
1927	昭2 亡き子に Op.2 1. 讃 歌 2. 子 守 歌 3. 悲 歌	自 作 詞 〃 沙 良 峰 夫	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	Es: C: d:	J = 56 J = 46 Andante triste (J = 60)	Pf 又は Orch	15
1929	昭4 小 曲 集 Op.6 1. 五 月 雨 2. 冬 の 夕 3. 啞 娘	自 作 詞 〃 〃	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	f: C: f:	Andante J = 76 Andante moderato J = 76 Larghetto ♩ = 80	Pf 又は 管弦七重奏	10
1930 ～1931	昭 5～6 関秀抒情詩集 Op.7 1. 唄 (ギターをとりて) 2. 火 を 抱 く 3. 桜林の接吻 4. 春 宵 5. 女 6. 牛	山 口 宇 多 子 品 川 陽 子 〃 岡 田 淑 子 深 尾 須 磨 子 米 沢 順 子	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	f: e: d: g:	J = 60 ♩ = 72 J = 60 J = 50 ♩ = 80	Pf 又は 管弦七重奏 (春宵は フルート伴奏)	10
	芭蕉紀行集 Op.8-1 1. 野ざらしを 2. 馬 に 寝 て 3. 海 く れ て 4. 冬 の 日 や 5. あ ら た ふ と 6. 閑 か さ や 7. 荒 海 や 8. 五 月 雨 の 9. 菊 の 香 や 10. 旅 に 病 て	松 尾 芭 蕉 句	$\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	d: a: a: e: J = 60 J = 60 e: J = 60 J = 60 a: J = 56 J = 60	J = 80 J = 55 J = 70 J = 70 明るく J = 60 J = 60 J = 60 J = 60 J = 56 J = 60	Pf 又は Orch	10
1931	昭6 現代詩集 第1集 Op.9 1. お も ひ 出 2. 牛 3. 短 章 4. 病 熱	今 川 英 一 米 沢 順 子 黄 瀛 大 木 惇 夫	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	f: D: es:	♩ = 92 のんびりと J = 60 J = 100 淋しく ♩ = 132	Pf	10
1932	昭7 現代詩集 第2集 Op.10 1. 月 夜 の 猫 2. 凍 え た る 魚 3. 鳩 4. 鴉毛の婦人	大 木 惇 夫 室 生 犀 星 高 村 光 太 郎 萩 原 朔 太 郎	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	C: a: C:	♩ = 108 ♩ = 112 ♩ = 108 ♩ = 108	Pf	10
1933 ～1935	昭 8～10 現代詩集 第3集 Op.11 1. 積 雲 の 歌 2. 死 3. 熟 帯 海 4. 靴みがきの唄	尾 崎 喜 八 金 井 融 前 田 鉄 之 介 長 田 恒 雄	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	F: e: F: F:	♩ = 100 J = 64 J = 76 J = 96	Pf	10
1936 1929	昭11 昭4 逝ける人に Op.12 1. 落 葉 2. 僧院と尼僧	山 村 耕 二 三 木 露 風	$\frac{3}{4}$ $\frac{3}{4}$	g: a:	Grave J = 76～80 内省的に J = 65	Pf 又は Orch	3 6
1934 ～1936	昭 9～11 啄木短歌集 Op.13 1. 雨 に 濡 れ し 2. わ か れ 来 て 3. こ こ ろ み に 4. 友 が み な 5. 秋 の 夜 の	石 川 啄 木	$\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$	h: h: G: D: h:	J = 96 J = 56 J = 60 J = 64 J = 64	Pf 又は 管弦七重奏	5

作曲年代		題 名	作 詞 家	拍子	調	発想標語など	伴 奏	所要 時間 (分)
1943	昭18	三つの悲歌 Op. 17 1. 身はたとひ 2. 勲 の 家 3. 孝 塚 に	吉 田 松 陰 西 条 八 十 平 野 哲 司				Pf 又は 1管 Orch	10
1951	昭26	現代詩集 第5集 1. 岩手病院 2. 我が家の台所 3. しらなみ 4. おもかげの雲	宮 沢 賢 司 尾 崎 喜 八 中 野 重 治 品 川 陽 子	$\frac{4}{4}$ $\frac{2}{2}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$	a : g :	J = 84 ♪ = 96 ♪ = 120 J = 60	Pf	
1951 ～1955	昭 26～30	童 謡 集 Op. 25					Pf	約20
1952	昭27	現代詩集 第4集 Op. 24 1. 朝の憩い 2. 煙となって 3. 幻 聴 4. 妹 に	窪 田 啓 作 新 藤 千 恵 井 手 文 雄 加 藤 周 一	$\frac{2}{2}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{3}{4}$	As:	J. = 60 J = 66 J = 60 J. = 68	Pf 及び 管弦八重奏	9
		子供のための組曲Ⅰ Op. 25 1. 雨 の 歌 2. 虹の橋わたる 3. シャボン玉 4. 子猫と手毬	吉 村 比 呂		f : As: f : F :	J = 96 J = 80 J = 60 Leggerissimo J = 120	Pf 及び 管弦八重奏	約4
1955	昭30	子供のための組曲Ⅱ Op. 26 1. リ ン ゴ 2. バ ナ ナ 3. ミ カ ン 4. 八 百 屋	吉 村 比 呂				Pf	約5
		日本民謡集Ⅱ(童唄) Op. 28					Pf	
		日本民謡集Ⅲ(6つの農作業歌) Op. 30 1. 草 刈 唄 2. 麦 搗 唄 3. 田 植 唄 4. 田の草採唄 5. 盆 踊 唄 6. 粃 摺 唄		$\frac{2}{4}$ C $\frac{2}{4}$ $\frac{2}{4}$ $\frac{2}{4}$ $\frac{2}{4}$	F : a : a : f : a : a :	J = 52 J = 52 J = 60 J = 56 J = 84 J = 72	Pf	
		子供の生活から 1. ゆらゆら吊橋 2. 赤 ん 坊 3. 叱られ坊主 4. 坂	新堀清志(深尾須磨子補) 近 藤 東 サトウ・ハチロー 宮 崎 孝 政	$\frac{2}{2}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{2}{4}$	C : F : Es: Es:	J = 76 ♪ = 120	Pf	
1957	昭32	日本民謡集Ⅳ						

- ★受賞作品：1934年 「小交響曲」(シンホニエッタ) 第3回音楽コンクール作曲部門第2位
1937年 「ヴァイオリンソナタ」 国際放送管弦楽懸賞第2位
1939年 「小交響曲」(シンホニエッタ) ワインガルトナー賞優等賞
1940年 管弦楽序曲「大地を歩む」 日本中央連盟懸賞一等入選
1950年 「芭蕉紀行集」 第20回国際現代音楽祭に入選
1954年 「ピアノ協奏曲」 尾高賞受賞・佳作に入選

5 度和声論

「音楽の時」1948年刊行 箕作秋吉著より

- (1) 創作らしいものをはじめたのは1926年で、1928年（昭和3年）「二つの詩」1929年（昭和4年）「小曲集」の作曲と共に、東洋的な旋律の中に、今までにない何か異った音体系があるに違いないと信ずる様になった。
- (2) ①獨逸近代和声法（特にシェーンベルク 4 度和声系・リーマン系統のライプチヒ派の理論）②近代フランス音楽の創立者 ドビュッシー（全音音階系）・ラヴェルが東洋的な材料を取り扱った場合の音体系 ③ロシア音楽の和声（日本と近似の旋律を有する）以上3組の研究を提案する。
- (3) 1929年 日本音階が5度の音列から出発していること及びシェーンベルクの4度和声が5度の音列と密接な関係を有することを、田辺尚雄氏の「日本音楽講話」及びシェーンベルク「和声学」から知る。
- (4) 日本的な和声の基礎は（日本音系は3000年前の周代の5度音列や2000年前のピタゴラス時代の4度音列と同じものである）

$$\left(\frac{3}{2}\right)^n \quad n=0, 1, 2, 3, 4, 5, \dots \quad (n \text{ は整数})$$

なる式で、その根音に対する振動数比を表される諸音から成り立つ5度和声である。

〔注〕 5度の音程の2音は、その振動数比が2:3であるから、5度の音列は基音の振動数を1とすれば $\left(\frac{3}{2}\right)^n$ なる式で振動数を表すことが出来る。

$$\begin{array}{l} \text{振動数比} \left\{ \begin{array}{l} C \cdot G \cdot D \cdot A \cdot E \cdots \cdots \\ 1 \quad \frac{3}{2} \quad \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \quad \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \quad \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \times \frac{3}{2} \cdots \cdots \\ \left(\frac{3}{2}\right)^0 \quad \left(\frac{3}{2}\right)^1 \quad \left(\frac{3}{2}\right)^2 \quad \left(\frac{3}{2}\right)^3 \quad \left(\frac{3}{2}\right)^4 \\ \leftarrow \text{Fis} \leftarrow H \leftarrow E \leftarrow A \leftarrow D \leftarrow G \leftarrow C \end{array} \right. \end{array}$$

- (5) シェーンベルクの4度和声は $\left(\frac{3}{2}\right)^{-n}$ で諸音の振動数比が表されるところの5度和声の下の音列による和声であり、ヨーロッパの短調に相当する5度和声のイマジナリーサイドである。

$C \rightarrow F \rightarrow B \rightarrow Es \rightarrow As \rightarrow Des \rightarrow Ges \rightarrow \dots$ 等よりなる和声で、上方に転回すれば4度の音列をつくるので4度和声の名がある。

$$\leftarrow Ges \leftarrow Des \leftarrow As \leftarrow Es \leftarrow B \leftarrow F \leftarrow C$$

- (6) 5度和声論という音響的な数式による理論に基いた作品中、最も成功したのは「芭蕉紀行集」で、逆に理論を適応してみた「シンフォニエッタ・第3楽章日本風サラバンド」との2曲が純粋な実験作品である。「落葉」に到ってやや進展した姿を示し、それ以後の作品は如何

にしてこの体系を西欧の音楽の体系に取り入れるかという実験であった。

- (7) 私が日本的和声乃至東洋的和声というのは純日本的旋律に和声づけた場合、耳が要求した和声・対位法を指している。従来、旋律の和声付けは総て整数倍音体系（3度和声）に依って行なわれていたのに対し、5度音列の和音を近代楽におけるが如く、単に効果的役割に用いるのみでなく、3度和声とは別個の一つの体系として、之に機能的な役割割りを持たせ、更に之を3度和声と結びつけて世界的な音楽に対する和声学に資するのが、私の着想であり、又その後の努力であった。

和声体系発展の史的概観

12音音楽まで（1954年）より

- (1) 一つの和声体系が3000年に亘って健全な発達を展開した時、作曲家が革新的な又独創的な音楽を書こうと追求すると不協和音の増大によって、音程の単位が次第に狭まっていき、その変化に即応して最も適当な和声的な構成が生まれてくる。
- (2) この体系が5度音列体系であって、その行きつく終極は、音程の単位が半音になった場合の12音音楽であり、終極に至るまで調性を持ち無調となり得ないのである。
- (3) 音楽がこの体系の終極の段階を終った場合——電気楽器による振動数が連続的に変化する音楽が登場して、完全に音楽は無調になると考えられる。
- (4) 12音音楽において、最も無調に近づける処理を施せば、その結果は無調とならずに増4度の差の複調的な音楽になる。
- (5) 5度音列体系の本質をよく認識すれば、対立するかの様に見える東洋と西洋の和声体系も一つの大きな体系中に包含され、その合体したものは連続的に、そして健全に12音音楽へと進展することが可能である。
- (6) 音楽の本質は、社会の為に存するという考えからすれば現代に用いられ始めたが、まだ不完全な12音音楽が広汎な社会に受け入れられ、人類がこれを楽しむようになるのは音楽の進展が加速度的に早くなるとしても相当先のことであるから、12音音楽は単なる音楽の崩壊過程の一現象ではない。（要約）

〔注〕

和声体系 自然現象と関係深い音楽の秩序。

理 論 音楽が物理的現象と何等かの関係にあるもの。

音楽理論 過去の創作が良いと考えられた音の取扱いを統計的に導き出した作曲の技術で、形式は和声法・対位法・器楽法として参考になるが、将来の創作を規矩するものでない。

● 松尾芭蕉 (1644年～1694年)

江戸前期の俳人。俳諧の革新を大成した芭風の祖。伊賀国（三重県）上野の生まれ。藤堂良忠に仕えたが病死と共に致仕。京に上り諸学を修め、後江戸に下り、延宝8年、深川芭蕉庵に入居。談林風の俳諧にあきたらず新風を求め、漢詩文調・破格調を経て蕉風確立。天和3年、虚栗（みなしぐり）刊行。以後、没年迄各地を行脚、漂泊の人生を送る。

俳諧7部集 冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・續猿蓑

- ^{ノザラシキコウ}野晒紀行 俳諧紀行文。貞享2年（1685年）成立一冊。貞享元年秋から翌年4月にかけて、伊賀・大和・山城・美濃・尾張・奈良・京都・甲斐をめぐる旅の紀行。「甲子吟行」とも言う。
- ^{オノノヨフミ}笈の小文俳諧紀行。宝永6年（1709）門人乙州が刊行。一冊。貞享4年（1687）江戸より伊賀・大和を経て、翌年須磨・明石に至る紀行文。別称「卯辰紀行」「大和紀行」「芳野紀行」
- 奥の細道（おくのほそみち）俳諧紀行文 元禄15年（1702）刊行。一冊。元禄2年3月、門人曾良を伴い江戸深川を出発、奥羽・北陸を経て9月、美濃の大垣に至る5ヶ月余・行程600餘里に及ぶ旅日記。芭蕉の句境は著しく枯淡軽快な傾向に深化する。

尚、「奥の細道」は紫式部の「源氏物語」と共に日本の代表的な古典として国際的な存在である。その翻訳は現在英訳が3種・フランス語・ドイツ語・スペイン語訳が一種ずつ刊行されている。ロシア語訳は既に1930年に出ているが、今は手に入らない。しかしこの様に世界の主要な言語に翻訳されるのは珍しい事といえる。（佐藤和夫、西洋人の視点より）

西暦	年 号	年令	年 譜 (旧 暦)	著 書
1644	正保元年		伊賀上野（三重県上野市）の農人松尾与左衛門の二男として生まれる。幼名金作。後、忠右衛門宗房という。長男 半左衛門。姉一人。妹三人。	
1656	明暦二年	13歳	二月十八日父死亡（四十余歳）	
1661	寛文元年	18	郷土の先輩俳人に就いて俳諧を学ぶ。号は宗房。	
1662	寛文二年	19	上野城付き三千石の侍大将藤堂新七郎良精家に台所方使用人として奉公。俳諧を通じて御曹子良忠（俳号蟬吟）から格別の恩顧を受ける。	
1664	寛文四年	21	京の松江重頼編『佐夜中山集』に発句二句初入集。以後寛文十二年まで計九集に入集。上野俳壇の代表的存在になる。	
1672	寛文十二年	29	上野の俳人三十余名から発句をつのり、判者となって三十番発句合『貝おほひ』を編す。春、専業俳諧師として江戸に出る。	
1673	延宝元年	30	京都から江戸に移住した俳諧師高野幽山の執筆（書記役）を務める。大阪に西山宗因の談林風俳諧が勃興。	『貝おほひ』を出版。
	延宝三年	32	「桃青」を号する。五月、幽山・似春・信音らと、江戸下向中の宗因に初対面、百韻連句を興行。	
	延宝四年	33	六～七月、江戸移住後はじめて伊賀に帰郷した。	『江戸両吟集』を出版。
	延宝五年	34	之より四年間、神田上水関係の事務を副業とし、都心の小田原町に居住。	
	延宝六年	35	俳諧万句を興行して宗匠としての立場を確立。	『桃青三百韻』を出版。
	延宝八年	37	四月、杉風・其角・嵐雪以下二十一名の作を結集する。冬、点取俳諧をめぐる点者社会の俗悪さに失望、都心での点者稼業を放棄し、江東深川村に隠棲。	『桃青門弟独吟二十歌仙』刊。

西暦	年 号	年令	年 譜 (旧 暦)	著 書
1681	天和元年	38	「乞食の翁」を自称。春、門人李下から芭蕉の株を贈られ、草庵の庭に植える。之から芭蕉庵の名が生まれた。当時行きづまりに瀕していた談林風脱皮の意欲を示す。	『俳諧次韻』二百五十韻を出版。
	天和二年	39	京の望月千春編『武蔵曲』刊。はじめて「芭蕉」号で入集。十二月二十八日、江戸大火で芭蕉庵が類焼。	
	天和三年	40	六月二十日、郷里で実母が没。冬、門人知友のカンパで芭蕉庵が再建される。	其角『虚栗』(芭蕉)跋刊。
1684	貞享元年	41	八月、『野ざらし紀行』の旅に出発。伊勢参宮後、伊賀に帰郷。のち大和・美濃・尾張と歴遊。十一月、名古屋の門人と『冬の日』と題する歌仙五巻を巻き、はじめて純芭蕉風を打ち出す。歳末伊賀に帰郷して越年。	『冬の日』成る
	貞享二年	42	二月中旬伊賀・奈良・京・大津・尾張熱田・鳴海を経て、四月末江戸に戻る。旅行中、行く先ざきで蕉門が発展してゆく。	
	貞享三年	43	蕉風の影響が急速に波及。正月、江戸蕉門十六名による「初懷紙」百韻を興行。唯美的新風調の一典型を示す。曾良入門。	「古池や」作。
	貞享四年	44	八月、曾良・宗波と常陸鹿島の月見におもむく。十月二十五日、『笈の小文』の旅に立出。十二月末伊賀に帰郷	紀行『鹿島詣』成る。
1688	元禄元年	45	三月まで伊賀滞在。三月中旬、門人杜国を伴って、吉野・高野山・和歌山・奈良・大阪・須磨明石を巡遊。以後京都・大津・岐阜・尾張の門人を歴訪。八月十一日岐阜より木曾路に入り、信州更科で名月を賞し、八月末江戸着。	後に紀行『笈の小文』となる。
	元禄二年	46	二月末、芭蕉庵を近所の平右衛門に譲渡し、三月二十七日、曾良を伴って江戸を出立。日数約百四十日を費やして奥羽北陸約六百里を行脚。八月二十日ごろ美濃大垣に到着。『ほそ道』の旅を終わる。九月中下旬伊勢山田に滞在。外宮遷宮式を奉拝。九月末、伊賀に帰郷。十二月京都に去来を訪ね、歳末、大津で智月尼に初対面、膳所で越年。	『更科紀行』成る。
	元禄三年	47	正月はじめ伊賀に帰郷。四月六日、大津南郊の幻住庵に入り、七月二十三日まで静養の日々をおくる。八月、大津馬場の義仲寺に滞在。九月末帰郷、十二月京都、歳末大津乙州宅で越年。	『幻住庵記』成る。 『ひきご』刊。
1991	元禄四年	48	正月帰郷。三月まで滞在。三月末、京に出る。四月十八日から五月四日迄洛西嵯峨の落柿舎に閑居。五〜六月、京都に滞在し去来・凡兆編『猿蓑』の選を監修する。九月二十八日、大津を出発。十月二十九日、江戸日本橋橘町の彦右衛門方に借宅し越年。	『嵯峨日記』成る。 『猿蓑』出版。
	元禄五年	49	芭蕉は近畿で俳諧の「軽み」を説いたが、江戸でその徹底に努め、蕉風は、これによって高度の庶民詩として成熟する。五月、杉風・曾良らの尽力で旧庵の近くに新築された三度目の芭蕉庵に入居。八月彦根藩士森川許六が芭蕉庵を訪ねて入門。九月、出羽の図司呂丸、膳所の珍硯が来訪。珍硯は翌年一月まで芭蕉庵の食客となる。	「芭蕉を移す詞」を書く。 『芭蕉庵三日月日記』を編す。
	元禄六年	50	三月、甥桃印(三十三歳)が結核のため芭蕉庵で死亡。深い精神的打撃をうける。五月、許六の帰藩に際して「柴門ノ辞」を贈る。七月中旬から一ヵ月、精神的疲労のため門を閉ざす。	「閑閑の説」を書く。
1694	元禄七年	51	正月、郷里の兄に祝儀金を送る。四月、書家柏本素竜に依頼していた『おくのほそ道』の清書本が出来上がる。五月十一日、寿貞尼の子二郎兵衛を伴って帰郷の途に就き、同月二十八日伊賀に到着。閏五月〜七月上旬、大津・膳所・京都の門人を歴訪。俳席を多く勤めた。六月初め、寿貞尼が芭蕉庵で病没した。七月中旬帰郷して盆会を営む。八月十五日、実家の新庵に伊賀の門人多数を招き、みずから献立を作って観月の句会を催す。九月八日、郷里を出て大坂に向かう。奈良に一泊。九日大坂着。十日から頭痛・悪感に悩みつつ俳席を多く勤めたが、二十九日容態が深刻化。十月五日、病床が門人之道宅から南御堂前の花屋仁右衛門の貸座敷に移る。同十二日、申の刻(午後四時)永眠。遺言により遺骸は大津馬場の義仲寺境内に埋葬。	『続猿蓑』の選句 「旅に病んで」辞世をよむ。

芭蕉紀行集の句

(1) 野ざらしを心に風のしむ身かな

野晒紀行

「千里に旅立て路^{ミチ}糧^{リョウ}をつつまず、三更月下無何に人と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋8月、江上の破屋を立いづる程、風の声そゞろ寒げ也」と書出してこの句がある。

貞享元年8月 41才の作。門人、千里を伴れて旅に出る門出の句で、何か思いつめた悲痛の調が強い。前年の夏の実母の死が、郷里伊賀へと彼の心を誘い、又、未だ詩人として自己の芸術的句境を確立し得ない苛立ちが、停滞の定住より漂泊の旅へとかりたてたのであろう。しかも旅で亡き人となった西行・宗祇・杜甫や禅僧達の運命^{サダメ}も想い、詩人として悲壮な決意を物語る重要な句である。

しかし、この旅中、名古屋の連衆と唱和した五歌仙は、後に蕉風開眼と評され句集「冬の日」にまとめられ、芸術と現実の一致「風狂の心」が発現する。

(2) 馬に寝て残夢月遠し茶のけむり

野晒紀行

天和3年、40才の作、小夜の中山峠での吟。

「はつかあまりの月かすかに、山の根ぎわいと闇、こまの蹄もたどたどしくて、落ぬべき事あまたびなりけるに、数里いまだ鶏鳴ならず、杜牧が早行の残夢、小夜の中山に至りておどろく。」(笈日記より)

この句は、杜牧(杜甫に対して小杜という)の「早行詩」によって想を発したもので、3段の推敲を経ている。字余りの漢語調は当時の風ではあるが、漢詩的な外形が、内面化され結晶化されて、不思議な詩心が画かれている。「馬にねて」「残夢」「月遠し」「茶のけむり」の四段に途切れた句の畳み重ねには、次第に眠りから覚めてゆく意識の推移がある。夢と現実の重なりあった世界を「茶の煙」という庶民のなつかしい香に托して結んでいる。小夜の中山は芭蕉憧れの和歌の先人、西行法師のゆかりの地である。

(3) 海くれて鴨の声ほのかに白し

野晒紀行

貞享元年、41才の作

「尾張の国あつたにまかりける比^ヒ。人々師走の海みんとて、舟さしけるに」(鍛管物語より)

「海浜日暮して」(甲子吟行(野晒紀行)より)

「やみに舟をうかべて 浪の音なぐさむれば」(悼芭蕉翁より)

芭蕉は10月に、尾張の国、熱田の「景清が屋敷」に近い林桐葉の許に身を寄せながら10月11月は名古屋に在る事が多く、前述の「冬の日」を仕上げている。師走には桐葉亭に戻りこの句を吟じている。

嗚がれた様な、美しくない鴨の声は、平安朝時代、雁の声に変わって殆ど詠まれていない。芭蕉はこの句で「鴨の声」を主題とし抒情の対象とした古代・万葉時代への復帰を果たしている。(山本健吉氏) 夕闇の中にさだかには見えない鴨の声を、一瞬「ほの白い」と聴きとめた感性の鋭どさが、5・5・7の破調と調和している。「海くれてほのかに白し鴨の声」となるべくところを、陳望道の所謂随語倒装をして成功し、特異な余韻を漂わせている。

(4) 冬の日や馬上に氷る影法師 「笈の小文」

貞享4年、44才の作

「あま津繩手、田の中に細道ありて、海より吹上る風、いと寒き所也」

三河の国保美の里に陰栖する愛弟子、罪のため蟄居中の杜国を越人と連れ立ち訪れる旅の句
「豊橋から天津まで約三里、天津部落の出はずれから田原町の北境豊島の橋まで約一里位の
間、渥美湾に沿う冬は非常に寒い。この地方では古くから「養子に行くか、天津の縄手を裸で
飛ぶか」という諺があり、共に辛い事だからである」とある。(芭蕉俳句新講より)

荒涼とした冬の薄ら日の中で、馬上に氷りついた自分自身の姿を「影法師」とまで、存在感
のない「自画像」として見つめているのである。

(5) あらたふと青葉若葉の日のひかり 「奥の細道」

(日光) 卯月朔日、御山に詣拝す。往昔、此御山を「二荒山」と書しを、空海大師開基の時
「日光」と改給ふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光一天にかゝりて、恩沢八荒にあふれ、
四民安堵の栖穩なり。猶、憚多くて筆をさし置ぬ。(奥の細道より)

元禄2年、46才、日光詣拝の句、卯月朔日(陽暦5月19日)は更^{コロモガエ}衣で、綿入れを脱ぎ袷に着
かえる日である。心改まるすがすがしい思い、瑞々しい溢れるばかりの新緑・輝やく陽光、当
時の徳川家東昭宮への讃歌もこめている。

(6) 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 奥の細道

(立石寺)^{リッシャクジ}山形領に立石寺と云寺あり。慈覚大師のか開基にして、殊清閑の地也。一見すべき
よし、人々のすすむるに依て、尾花沢よりとって返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。麓
の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。

岩に巖を重ねて山とし、^{ショウハクトシフリ}松栢年旧、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉て、物の音きこえず。
岸をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。(奥の細道より)

元禄2年、46才、5月27日(陽暦7月13日)東北の初夏は、深山の蟬が一時に鳴きたてる季
節ではなく、初蟬の声が山寺の静寂を深め、芭蕉は大自然の営みに没入し、この「閑寂の境」
を詠み得たのである。

(7) 荒海や佐渡によことふ天の川 奥の細道

北陸道^{ホクリク}に行脚^{アンギョ}して越後の国出雲崎と云う處に泊る。かの佐渡が島は海の面^{オモ}18里、滄波^{ソウハ}を隔てて、東西35里に横折り臥したり。峰の峻難、谷の隈隈まで、さすがに手に取るばかり鮮かに見渡さる。むべ此島は黄金多く出でて、遍く世の宝となれば、限りなきめでたき島にて待てるを、大罪朝敵の類ひ、遠流^{オンル}せらるるに由りて、唯だ恐ろしき名の聞あるも本意^{ホイ}なき事に思ひて、窓押開き暫時^{シバシバ}の旅愁を勞はらんとする程、日既に海に沈みて月ほの暗く、銀河半天にかゝりて、星きらきと冴えたるに、沖の方より波の音しばしば運びて魂削るが如く、腸ちぎれて漫ろに悲びければ草の枕も定まらず、墨の袂何故とはなくて、絞るばかりになん侍る。(銀河の序より)

(8) 五月雨の空吹きおとせ大井川 元禄7年紀行

「五月の雨かぜしきりにおちて、大井がは水出侍りければ、しまだにとどめられて、如舟・如竹などいふ人のもとにありて」(笈日記より)

元禄7年閏5月15日から19日まで、東海道の大井川の川止にあい、島田の川庄屋塚本如舟の家で、空の晴れるのを待った時の句。幾日も降りつづく雨に、大井川は濁流滔々として流れ、暗雲は低くたれこめて雨風は収まらない。芭蕉の焦躁の念が大井川に呼びかける豪放さは「荒海や」に通じるものがある。

(9) 菊の香や奈良には古き佛達 元禄7年紀行

元禄7年9月9日、重陽の日、支考・惟然を伴い、旧都奈良に遊んだ時の句。高雅な菊の花と、蒼古・閑寂な寺々に鎮座される御佛達の調和に、日本古来のハーモニーを聞く。

(10) 旅に病て夢は枯野をかけ廻る 元禄7年辞世

元禄7年10月8日、夜深に大阪花屋仁左衛門の家で、病床に介抱していた吾舟をよび書き取らせた。病中吟、最後の句。

この時、芭蕉は、去来に「これは辞世ではない、病中の吟だ。しかしかういう生死の大事を前に置きながら、どんなに生涯好きだった風雅の道とはいひながら、まあこれも一つの妄執といふものであろう——。」と。去来が答へて

「日夜心を風雅の道に努められ、山水野草乃至鳥獣の分ちなく、景色妙音に身を托され、今河魚の患へに疲れながら。この名句のあるといふのは、一門のよろこび末代の龜鑑であります——。」と。一座寂として声がなかった。

この日から更に衰弱、多くの弟子の手厚い介抱を受けながら、10月12日、遂に逝去。享年51才、本人の意志により、現在、大津市馬場1-5-20(管理者、落柿舎保存会)の「義仲寺」に木曾義仲の墓と並べて葬られる。

歌曲 芭蕉紀行集

土 肥 みゆき

造化にしたがい、造化にかえれとなり。 (笈の小文)

月日は百代の過去として、行かふ年も又旅人也。 (奥の細道・序章)

不易を知らざればまことに知れるにあらず。 (三冊子)

1689年、陰暦元禄2年3月27日漂泊の詩人松尾芭蕉は、未だ見しらぬロマンの地、奥羽北陸をめぐる「奥の細道」の旅に出立しました。300年の歳月を経たこの旅立ちを記念して、今年から(1988年)「俳聖芭蕉」に寄せる様々な行事が、故人ゆかりの各地で計畫されています。

その後半生を旅を栖とし大自然の中に没入して、生涯の「風狂の心」を僅か17字の中に封じ「俳句」を芸術として結実させた芭蕉の偉大な軌跡は、今や国内のみでなく「HAIKU POETRY」として国際的な評価を得て、世界の人々に豊かな恩恵を与えています。

一方、明治の洋楽輸入後、西洋音楽の洗礼を受けた日本人は、自らの文学との結びつきを「芸術歌曲」として育んできました。伝統文学の一つ「和歌」は信時潔・清瀬保二・箕作秋吉・平井康三郎氏等の先輩作曲家によって秀れた作品となりましたが、俳句は余りにも短かく凝縮された詩の故か、歌曲としての作品は極めて少ないのが惜しまれます。

箕作氏は1930年より翌年にかけて、芭蕉の歴大な遺産の中から珠玉の10句を選び「歌曲」と「管弦楽の音詩」として創作しました。

氏の作曲家としての出発は遅く1926年31才の時で初期の作品は、シューベルト・ブラームス(歌曲忘き子に) ショパン・チャイコフスキー(浪漫組曲)・モーツァルト(古典組曲)等の影響が強く、次代にはドビュッシー・ラヴェル(二つの詩・小曲集・僧院と尼僧)との模索時代があり「歌曲芭蕉紀行集」に至って、はじめて「自分の言を得た作品」に達しています。

句は音と一体化し、雄渾・閑寂な大自然と人生の侘び・さびを包み込んで感銘の小宇宙を創造しています。

箕作氏は次の様に語っています。(吉田秀和氏への抗議「ゲイシャガールのものと人間的なもの」より)

「芭蕉が17字で、あれだけの事を表現したのに対し、どの程度迄それを音楽で表現出来るか試みたのであり、同じ意味で少ない線で多くを表現した雪舟や大雅堂の筆致を学びたいと思ったのである。この為には極度に音楽の基本的な技術が必要であった。特に対位技巧は音階と和音を代えるだけであるが、極度の濃縮を必要とした。そうでもなければ17字で表現不足となり、第二芸術論を惹起するような失敗に陥る危険がある。従来の対位法的な書き方に、新しい材料を投入したのであるから、私にとって生やさしいことではなかった。一中略— 短い音楽に於ける表現手段の集中、之に相応する楽式・対位手法・十二音階的处理・等を素因とした私のオリジナリティーの最も強く出ている音楽である」

作品は、師ゲオルグ・シューマンの影響を受け簡素であり、ヴィルヘルム・クラッテの2度

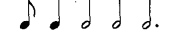
和声より12音音楽への移行・東洋和声・ロシア民謡の面影を含みながら、純化した5度和声より成り立っています。

私には、この作品は、新鮮な現代性に満ちながら、感性と知性の接点より生まれた透明な音を携え、遙かな時を旅して、芭蕉の愛した大自然と詩の秘境へ没入して、演奏せねばならないと思っています。その上演奏者の品格・俳句の世界への理解と愛情がなければ成立しない歌曲の世界と考えています。

作品の特色

- (1) 箕作秋吉氏は「作曲するにあたって、半分以上の時間をその旋律の抽出に費した」と語られています。俳句の5・7・5の句の旋律は、語る如く・謡う如く丹念に作られています。

又、「歌曲集が一つできると、それを土台にして器楽曲が生まれる場合が多い」との言葉通りこの曲は後に「オーケストラの音詩」になっています。

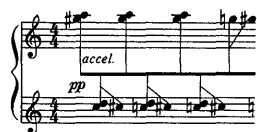
- (2) 歌のパート音符は  5種類よりなり、簡素なりズム表現です。
 (3) ピアノのパートの音型は 略 3種類です。

1) 分散和音



野ざらしを・馬にねて・冬の日や・あらたふと
 荒海や・五月雨の・旅に病て

2) 2度和音






海くれて・冬の日や・閑かさや・五月雨の

3) 多声的 (ポリフォニー)



野ざらしを・馬にねて・冬の日や・閑かさや
 菊の香や

- (4) ピアノパートは大譜表でなく、透明な音の響を要求して高音・次高音の使用が著しく多くなっています。

1)  1・2・3・4・5 6・8・で使用する	2)  7・8で使用する	3)  9・10
---	---	--

- (5) Tempo は総てゆるやかで、微妙な poco rit・poco accel・a tempo が、10曲中6曲に使われています。

Tempo ♩ = 55・56・60・(5曲) 70(2曲) 80

- (6) 和声 (楽譜参照)

●オーケストラのための音詩「芭蕉紀行集」

「歌曲 芭蕉紀行集」と共に1930年10月から1931年6月の間に作曲されたものを原曲として1937年と1947年の2回にわたってオーケストレーションされています。

楽器編成

フルート	1
オーボエ	1
クラリネット[B]	1
ファゴット	1
ピアノ	1
弦楽5部	

以上 全曲10曲に共通

歌のパート

アルト・サキソフォーン	(第1・4・10)
ホルン	(第2・3・7)
トランペット	(第5・6・9)

スコアでは之等のパートは、あたかも歌のパートの様にピアノと第一ヴァイオリンの間に記されている。

- オーケストレーション (海くれて鴨の声ほのかに白し)
- ソロパート (1・2・3・4)

Ex. 11 S. Mitsuoki: Dix Haikai de Basho (1930) end of the 3rd Movement.

1. 野ざらしを心に風のしむ身かな

[M] 箕作氏の解説
[Vo] 歌のパート
[P] ピアノパート

★アルト・サキソフォン(テーマ楽器)
1930年10月作曲

♩ = 80

[P] 指先たてて冷たい音で

mp mf f

D-A-E-H

[P] 短前打音はげしくはっきりと

♩ = 60 poco rit. p (♩ = 80) a tempo

の ざ ら し を

poco rit. p a tempo mp

[P]・和音とメロデーのタッチは変えてEがメロデーの音としてはっきり。

こ こ ろ に か ゼ の

mp

ピアノパートの旋律は歌と美しいアンサンブルで。♩ = 60 dim.

poco rit. 7

し む み か な

poco rit. p 風の様に

p

・イ短調(洋楽では二短調)の曲の終結を示すもので、ソプラノにトリトナス(増4度)の跳躍があり、最後はAの重複がありa→e→g-dの4和音で終る[M]

- 1) 10曲中、旋律・和声・リズム共に一番初歩的な曲。
- 2) 4拍子の六声音階より出来ている。
- 3) 歌の旋律は最小の一部リート形式の8小節より短縮され、5・7・5の3部に相応して、2・2・2の6小節の一部リート形式を整えている。

2. 馬にねて残夢月遠し茶のけむり

★ホルン(テーマ楽器)

1930年10月作曲

♩ = 55

・ 中山峠を越えてゆく、馬につけた鈴の音が高く低く聞こえる。余り激しくなく。

mp

う ま に

R.H.

D-A-E-H-F

[P] legato に弾くための指使いの工夫が必要。

ね て き ん む

mp

R.H.

・ イ短調からホ短調(洋楽的にはd:からa:に)に転調する(M)

p

と お し

dim.

p

Eへの導音Fは#されてA:の6度となり
和音はFis←H←E←AのA:の4和音となる(M)

mp

ち ゃ の け む り

6

- 1) 1曲目より進展して2・3・4・拍子が混じっている。
- 2) 同名異調への転調が試みられる。

3. 海くれて鴨の声ほのかに白し

★ホルン(テーマ楽器)

1930年11月作曲

♩ = 70

accel. mp

瞬間的に聴きとめた鴨の声

う み く れ

mp

A-E-H-F

p

pp

之のみD

accel. p

[P] ・曲首の深いプレスが大切。
Eの連打音に絶妙のユアンスをつける。
果しない薄暮の間を表現するのにゆるやかに
ひじからのタッチで演奏。

[P] ・指先を固くして少し鋭いタッチ。

a tempo

accel.

a tempo

て か も の こ え

8va

a tempo mp

accel. p

a tempo mp

・ハ長調(又はイ短調の全音階
ShiとFaによる増4度の和音の間に
DoとMiの挟まれている和音がみえる[M])

・高い音域の音は音響的效果を出して。

accel. [Vo]音程に注意

a tempo

ほ の か に し ろ し

accel. p

a tempo

pp

p

mp

p

・ここでイ長調(又は嬰へ長調)に転調して
同様な和音を作っている[M]

・前奏と同じEの連打音と鴨の声を
再びひびかせ消えてゆく。

1) 1930年10月作曲の「7. 荒海や」より飛躍して7拍子を取り、旋律・和声共12音音階的で、体系として最も進み、注目されている曲である。

4. 冬の日や馬上に氷る影法師

★アルト・サキソフォン(テーマ楽器)

1930年12月作曲

・2度と3度よりなるテーマは、その反進行を「菊の香や」のテーマに見出す。

♩ = 70
mp

ふ ゆ の ひ や

[P] 馬のひづめ音

[P] フレーズは $\frac{3}{4}$ を刻んでいる。

ば じょう に こ は る

mf

[P] > の位置に注意。

Poco più mosso

mp

mf

mp

p ritardando

dim.

[P] ・馬も人も氷る様に立ちすくむ。

・間

か げ ぼう し

・印象的に

ritardando p

A—E—H

- 1) 伴奏は稍 12音階的である。
- 2) 拍子は $\frac{3}{4}$ $\frac{4}{4}$ $\frac{5}{4}$ の混合である。

5. あらたふと青葉若葉の日のひかり

★トランペット(テーマ楽器)

1931年5月作曲

明るく ♩ = 60 ♩ = 60でなく≡という記号が使われている。

4であるが♩で弾く方がいい。

あらとうと あおはわか—

8va

mp

p

accel.

[P]・導入の下行アルペジオが(短いパッセージの中で)ヒンデミットの転調をしている。陽光を浴びる若葉の様な音色で。

[P]・6小節3連符のリズムが続く。

はの

8va

a tempo

mp

accel.

mf

a tempo

[P]・音楽の最高潮はピアノパートによって創られている。

8va

poco rit.

accel.

8va

poco rit.

L・H

R・H

[Vo]・ディナミックはmfよりmpにして、大らかさを表現。

ひの ひか—り

a tempo

mp

mf

8va

[P] ♩をlegatoに歌うこと。

- 1) 西欧の現代音楽に相似している。ジルマルセックスが指摘した様に、ヒンデミットの転調(一つの調の旋律が終らぬ内に他の調の旋律が対位的に登場する一種の複調)が行われる。[M]

6. 閑かさや岩にしみ入る蟬の声

★トランペット(オーボエ)(テーマ楽器)

1931年4月作曲

$\text{♩} = 60$

〔P〕・EFの二度和声は全曲一貫に、
 〔P〕・岩にしみ入る蟬の声として
 タッチを選ぶ事が大切である。〔P〕・短二度・短三度・減四度の音程よりなるモチーフは
 ・鍵の中で手前に長く引くやわらかい音で。 f f f f のリズム型を使って、4小節くりかえしている。

し ず か さ や い わ に
 し み い る せ み の こ え

・曲のクライマックスは $\frac{3}{4} \cdot \frac{4}{4} \cdot \frac{3}{4} \cdot \frac{5}{4}$ と拍子の
 急激な変化をもって表現している。

- 1) 作曲家自身もはっきり分らない新しい音階の旋律が生まれ、それは12音階の部分的な音で出来ている。〔M〕

7. 荒海や佐渡によことふ天の川

★ホルン(テーマ楽器)
1930年10月作曲

♩ = 60

[Vo] ・シンコペーションを3回使って雄大さを強調しています。

[P] ・夜の荒波を表現。

あ ら

pp D-A-E-H [P] Aの連打音ひびかせて。

*g*bassa-

[V] ・深い低音のひびきは北海の夜の壮大さと中に挟まれた2度和声は溶々とした孤独感を表現してゆっくりと重さをのせたタッチで。

[V] ・シンコペーション

う み や さ ど に

mf

*g*bassa-

[P] ・音域の拡大の上に *sf* を重ね大宇宙を表現。

[Vo]シンコペーション

よ こ た う あ ま の が わ

[P] ・本土と佐渡ヶ島海上18里の大空にかかる銀河の様な *glissando* 雄渾 *gva?*

E-H-Fis-C

sf sf sf sf sf

*g*bassa! *g*bassa!

[P] ・かたくならぬ *sf* で

- 1) 日本民謡とロシア民謡をつきまぜた様な稍暗い旋律は、13度の巾広い音程を持ちシンコペーションを持ってたくましく歌いあげられている。
- 2) 一曲目と同じく、歌は2・2・2の6小節1部リート形式である。

8. 五月雨の空吹きおとせ大井川

★トランペット(テーマ楽器)

1931年4月作曲

♩ = 60

Handwritten annotations in red:

- [P] 2オクターブの広い音域で激しさを表現
- [P] 指使い A アクセントを強く出せる。 B 連打音を美しく弾く事が出来る。共に右利きの指として。
- [P] ディナミックは自由に
- [Vo] [P] も少ない音で雄大さ豪放さを表現。

Lyrics:

さ み だ れ の
そ ら ふ き お と せ お お い
が わ

1) 「荒海や」と類似の傾向を持っている。

2) 二度の連打音及び tr は大井川川止めにあった芭蕉の焦躁の念が表現されている。

9. 菊の香や奈良には古き仏達

★トランペット(テーマ楽器)

1931年6月作曲

♩ = 56

C-G-D-A

[P][8]「五月雨の」前曲とは対照的な丸い legato のタッチで
ひじをやわらかに、指はハラを使って。

[Vo] [P] が優雅なアンサンブルとして

きくのかや ならにはふるき

mp

・曲のクライマックスを、ピアノパートで、リズムを細分し
盛上げる方法は2「馬にねて」でも行っている。

[Vo] legato で静かに

ほとけたち

[P] ポリフォニーが拡大されてゆく

・終止は6声に
なっている。

- 1) 雄渾な7曲目と激しい8曲目と対照的に穏やかな謡曲風旋律は7拍子にのりポリフォニーで作曲されている。
- 2) 高雅に典雅に演奏する事。

10. 旅に病て夢は枯野をかけ廻る

★アルト・サキソフォン(テーマ楽器)

1931年6月作曲

♩ = 60

[P] 右手と左手の音色音質をよくあわせて。

8va

p

mp

D-A-E-B

[P] 左手は旋律であり音の響をよくきいて legato に。
8小節のフレーズより出来ている。(前奏)

[P] 上のEの音をよく響かせる。

[P] 尚かるく、ハッソーチにして。

[P] 下のAの音をよく響かせる。

[P] 下のGの音をよく響かせる。

力無く mp

た

ひ

8va

pp

p

poco rit.

a tempo

[Vo] 山

[P] 倍音の中でAの音は少しあいまいに。

に

や

み

て

8va

A

[P] の山

[P] A・E が核音になっている。

- 1) 「野ざらし」の寂しさに対応したもので音階はロシア民謡調の要素が入り1曲目より尚暗く荒涼とした枯野を駆け廻る夢が表現されている。

(Vo) #、注意する。

[P] Eの音がピアノパートの山になる。

- 2) 歌のフレーズの山とピアノパートのフレーズの山は重ならない。
- 3) 指先で ♩=32分音符の音の粒を描えて Ped の使用を巧妙に。

演奏記録 歌曲 芭蕉紀行集 (1972年迄に 全曲演奏をした人達)

- 1930年11月22日 新興作曲家の集い 鯨井孝 (bar) 清瀬保二 (pf) 丸の内時事講堂〔注〕 (1)
(2) (7) 3曲試演
- 1931年6月22日 第1回新作曲家の夕, 鯨井孝 (bar) 清瀬保二 (pf) 赤坂三会堂〔注〕 (3) (4)
(5) (6) (8) 5曲試演
- 1932年10月9日 鯨井孝独唱会 鯨井孝 (bar) 清瀬保二 (pf) 〔注〕 全曲演奏 (9) (10) 初演
1933年11月6日 日ソ新興歌謡の夕 鯨井孝 (bar) 宅孝二 (pf) 築地小劇場
〔注〕 (2) (3) (6) (8) (9) 5曲演奏
- 1936年4月25日 古典和歌による鈴木徳一郎第2回独唱会 鈴木徳一郎, 鈴木知子 (pf) 蚕糸会館
- 1953年5月24日 鈴木徳一郎独唱会 鈴木徳一郎, 鈴木知子 (pf) 平塚江南高校講堂
- 1955年10月21日 第16回第一生命ホール音楽鑑賞会 宮原卓也 (bar)
- 1957年9月24日 渡仏記念古沢淑子独唱会 古沢淑子 (alt) 産経ホール
- 1958年3月15日 作曲家の個展 中村浩子 (alt) 荻原智子 (pf) ブリジストン美術館2階ホール
- 1966年11月7日 日本歌曲の歴史
- 1966年12月5日 第62回新進声楽家の夕 宇佐美桂一 (bar) イイノホール
- 1969年6月11日 村尾護郎独唱会 村尾護郎 (bs) 安芸彊子 (pf) 日佛会館ホール〔注〕 6曲演奏
- 1972年2月4日 現代の音楽展 '72 滝沢三重子 (sop) 塚田佳男 (pf) 文化会館小ホール

箕作秋吉作品 演奏者 (芭蕉紀行集以外の作品)

大橋勝雄・景山牧子・太田綾子・阿部秀子・関種子・藤原義江・森春子・四家文子・三宅春恵・畑中良輔・酒井弘・岡部多喜子・井崎千恵・小倉麗子・内山富美子・落合敬子
(1977年迄)

独唱 & 八重奏

- 1936年10月11日 独唱に聴く (ラジオ放送) 江文也 (bar) 室内管弦楽団
音詩 芭蕉紀行集 (管弦楽 1管)
- 1937年12月10日 Concert de nuit ラジオ・パリ・オーケストラ ルネ・バトン (cond)
- 1950年6月10日 24th. Festival of the International Society for Contemporary Music I.
N. R. Orch. Brussel

- 1950年10月5日 大阪管弦楽団 河合太郎 (cond) 音楽のしおり (ラジオ放送)
- 1951年2月13日 国際現代音楽協会発表演奏会 東京フィルハーモニー 箕作秋吉 (cond)
日比谷公会堂
- 1955年8月5日 ウィスコン州音楽祭第4夜 シンフォニー・オブ・ジ・エア ジョンソン
(cond) フィッシュ・クリーク
- 1958年12月3日 現代作品演奏会シリーズ ニューヨーク・フィルハーモニー レオポルド
・ストコフスキー (cond) メトロポリタン芸術博覧会ホール
- 1960年5月12日 新萌会第2作品発表会 日本室内交響楽団 箕作秋吉 (cond) 第一生命
ホール
- 1969年1月24日 第80回定期演奏会 札幌交響楽団 山岡重信 (cond)

レコード

- ① 現代日本歌曲集その1 Col. AI 3030
- ② 日本歌曲全集4 丹羽勝海 (ten) 三浦洋一 (pf) Vic. SJX. 1035
- ③ 歌曲集: 芭蕉紀行集 小倉麗子 (sop) 高木幸三 (pf) To. ORS. 39
- ① 芭蕉紀行集 江文也 (bar) 管弦楽伴奏 Vic. 5399 5 AB [注] 8曲
- ② 日本の管弦楽作品 読売交響楽団 山岡重信 (cond) Vic. VX-117

以上 [塔] より

参考文献及び引用資料

- 音楽の時 箕作秋吉 村松書店刊 1948年9月15日
- 讃歌と悲歌について 箕作秋吉 月刊楽譜 1932年4月21日
- 新歌曲の作曲について 箕作秋吉 音楽評論 1936年7月4日
- 自作案内(2) 箕作秋吉 音楽評論 1939年7月8日
- 聴衆のみなさまへ 箕作秋吉 箕作秋吉歌曲演奏会プログラム 1952年12月17日
- 作曲者のことば 箕作秋吉 第6回二期会邦人歌曲発表会プログラム 1958年9月7日
- 作曲者のことば 箕作秋吉 第6回邦人歌曲発表会プログラム 1955年7月6日
- 和声体系発展の史的概観と日本・東洋の和声論 箕作秋吉 小山郁之進編 株式会社思文閣
- 塔 Bibliography Series 箕作秋吉書誌 北島達雄・染谷周子・渡辺静子 国立音楽大学付属図書館
- 箕作秋吉作品発表会 清瀬保二 コンサート新聞 No. 107 1955年11月10日
- 作曲家の個展(第16回評) 清瀬保二 音楽旬報No. 187 1958年3月25日
- 箕作秋吉と芭蕉紀行集について 柴田南雄 日本の管弦楽作品・レコード解説書 Vic. VX—116-8
- 現代音楽作曲家群像 富樫 康 音楽芸術 1950年10月8日
- 日本和声の体系開拓 富樫 康 朝日新聞(夕刊) 1966年12月13日
- 現代の音楽展“72” 音楽芸術 1972年4月30日
- 日本の洋楽百年史 秋山龍英 第一法規 1966年
- 日本の詩歌(日本の歌唱集)別巻 中央公論社
- 日本作曲界の半世紀 秋山邦晴 音楽芸術 1974年1月
- 音楽五十年史 堀内敬三 鱒書房 1948年
- 世界音楽全集第39巻 箕作秋吉 春秋社
- 世界音楽全集・日本歌曲集 門馬直衛編 春秋社
- 日本歌曲全集 箕作秋吉・清瀬保二 作品集 畑中良輔 ビクター音楽産業株式会社
- 箕作秋吉歌曲集 内田るり子編 全音楽譜出版社
- 医科学大辞典 Vol. 45 講談社
-
- 校本 芭蕉全集 第一巻 発句編 角川書店
- 校本 芭蕉全集 第二巻 発句編 角川書店
- 校本 芭蕉全集 第七巻 俳論編 角川書店
- 芭蕉 おくのほそ道 萩原恭男校注(付 曾良旅日記・奥細道菅菰抄) 岩波書店
- 芭蕉—その鑑賞と批評 山本健吉 新潮社
- 「奥の細道」300年 井本農一・今栄蔵・堀切実・佐藤和夫・山口誓子 毎日新聞1988年2月21日
- 国語大辞典 小学館

原稿受理 1988年4月6日